
ヤマノウラ

kokom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤマノウラ

【Nコード】

N6552L

【作者名】

k o k o m

【あらすじ】

僕は確かにあの頃、彼と遊んでいた。
でもどうしても思い出せないんだ。
彼の顔が。

山の幽霊と奇妙な事件。
僕は真実を知りたいと思ったんだ。

「なあ、佐々木。山なんか無くなればいいと思わないか」

川崎が目の前山の山を見上げてぼやく。朝一番の、どこか暗い話の始まりだったがそれは僕たち二人の、田舎のとても健康な高校への登校中のお約束みたいなものであった。

「どうしたんだいきなり？」

「だってさ、この山がなくなれば俺たちはわざわざ山を迂回することなく、十五分は早く学校へ行ける。朝の十五分はそりゃ貴重だぜ。熱いコーヒーをふーふー冷まして飲みながらゆっくり今日の運勢だって確認できる」

「確かにそうだな。あと五分寝ようが三回出来ると考えるとすごく素敵なことに思える」

「だろ？　そもそも山なんかいらないだろ。この山が俺に何をしてくれた」

川崎の言うことは自分勝手な極論が多かった。文化祭のクラスの出し物を決める際に、川崎意外全員が喫茶店という意見に賛成だったにも関わらず「お前らもてない男たちの気持ち考えたことあるのかよ！」とただ一人フィーリングカップルを押し、まるで自分がもてない男たちの気持ちの代表のように延々と行った演説は今も伝説として語り継がれる。

「でもな、川崎」このまま川崎に同意し、こいつを調子に乗らせるのもつまらない。「山にもちゃんと役割はあるんだ。まずこの小さな山にだって生態系というものがある。人間は自分の能力に酔って今までに本来の生態系における役割から大きく外れてきた。これ以上関わるべきではないんだ。それにな、山をフィールドに仕事をしている人や、それこそ生きがいみたいに山を趣味にしている人だっている」

うーん、と考える川崎。

「加えて日本は山国だ。なにも進んで日本の特徴を奪うことはないだろ」

「でも現に俺は山で被害を受けているんだ。山の役割は分かった。でもないほうがいいだろ。山を削って町にしたほうがそれこそ日本のためだ」

「んじやお前が偉くなつてそうしてくれ」

それはまた面倒だな、と悩む川崎。どうもこいつは面倒くさい。

「そういえばさ、佐々木」

「ん？」

「昔さ、この山に子供の幽霊だか妖怪だかが出るって噂あったよな」

「ああ、あつたな」

山を見上げる。

確かに覚えているんだ。

この山で、僕は知らない誰かと遊んでいた。

*

「母さん、小さい頃のアルバムってある？」

放課後、家に帰ると母に尋ねていた。

朝の川崎との話で思い出した事。いや、決して忘れていたわけではないが気にしないようにしていた事。

それは単なる子供の妄想かもしれない。

僕が小さい頃、まだ小学生の低学年くらいだったと記憶するが、僕は山が好きでよく遊びに行っていた。

それは山が近かったこともあるし、そもそも子供は縦横無尽に動き回ることが仕事であり生きがいであり、山はそれに最高のフィールドであつたのだ。

僕はよく一人で山に行った。

友達がいなかったわけではないけれど、特に山遊びに関してはどうも馬が合わなかったのだ。

一人で山を走り、昆虫を取り、ウサギを見つけては一日中追い回した。

そんな僕は、ある日、山で一人の少年と出会う。

子供ながらに人見知りな僕であつたが、彼とは何故かすぐに仲良くなり、毎日のように山で遊ぶようになった。

山に行くと、彼はいつもそこにいた。

背丈は同じくらいで、顔は……。

顔……？

「ここにあつたと思つたんだけど。ごめん、すぐには見つからないわ」

母の声にはつとする。

「あれ？ あなたちよつと顔色悪い？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

そう言つて自室に戻る。

確かに遊んだ思い出はあるのだ。

しかしどういふわけか彼の顔が思い出せない。それにある日を境に彼は山に現れなくなつた。

アルバムに彼が写っている可能性は低い、が何か分かるかも知れないと思つたのだが。

「幽霊か」

川崎の言葉。

あの山には子供の幽霊が出るという噂がある。

そしてその噂はちょうど彼と出会つた時期に小学校で流れはじめた。

子供は感受性が高く、想像力豊かだ。よつて靈感が強いといわれるが、僕もそうだったのだろうか。

それならそれでいい思い出しよう。幸いに僕は幽霊が怖いとかそういうのではない。

明日川崎に何か知っていることがあるか聞いてみよう。
それで終わりだ。

*

「なあ、川崎」

「なんだ？」

翌日の登校中、川崎に尋ねてみた。

「昨日の話なんだけどさ」

「ああ、山がなくなればいいって話か？　一応俺なりにちゃんと考えてみたんだがな」

「あ、いや、その話はもういい。疲れた」

「なんだよ、ちゃんと論理的に考えてみたんだ。まず山というのは何故出来たのだろうか。地盤の隆起が発端の……」

「あー、わかった。その話はちゃんと聞く。でも今は朝だ。お前の鋭い論理に俺の寝ぼけた頭じゃついていけん」

「ほう。一理あるな」

にやりと川崎。朝から気持ちが悪い。

「でな、くだらない話でもしようじゃないか。昨日言ってたよな。あの山の幽霊のこと」

「ああ、最近じゃ噂は聞かないが昔はよく聞いたな。俺たちが小学一年か二年の頃だ」

小学校低学年。やはり時期は会っているようだ。

「お前は見たことあるのか？」

「いや、ないぞ。もともと幽霊なんか信じない性質だからな」

「そうか。他に何か知っていることは？」

「やけに食いつくな。どうした、いきなりオカルトにでも目覚めたか？」

「まあ、そんなもんだ」

「ははあ。まあ、誰にでもそういうのに興味を持つ時期は来るも

んだ。特に男はな。基本的にロマンの生き物なんだ」

「それで、何かあるか？」

「うん？ そうだな、一番よく聞く話はこうだ」

それから川崎はその幽霊について話し出した。

その幽霊は山の中でいつも一人だ。

それなのにいつも楽しそう。

幽霊を見た人はみんな逃げてしまう。

気味が悪いのだ。

一人で何か喋っているから。

何を言っているのかは分からない。

ただどうしようもなく気味が悪い。

「いつも一人か……」

納得できる。彼はいつも一人で僕を待っていたのだから。

「それから例の事件あったろ。アレもその幽霊の仕業じゃないかとも言われているな」

「例の事件？ なんだそれ」

「あれ、お前知らなかったのか？ 一時騒ぎになってただけだな。山で変な事件があったんだよ。山の動物、トリとかタヌキとかウサギとか。それにいろんなムシもだ。それらがグツチャグチャになつて一箇所に集められてたんだよ。もちろんみんな死んでた。犯人は結局分からずじまいみたいだぜ」

そんな事件知らない。山の近くにいる僕なら絶対に聞いていたはずだ。

なのに知らない。

「なあ、佐々木。ホントに知らないのか？ 学校から「山に近づかないように」って連絡網とか回ってたはずだけど」

「んー、思い出せん」

「その後は何もなかったし、幽霊の噂もその事件の後は聞かなく

なったな。大体の幽霊話って事件とかあると盛り上がったちゃってホントかどうかわかんない目撃証言がどっと増えるだろ？ それなのにこの山の幽霊の話は事件をきっかけにぱったりだ。そうなるって幽霊を見たって話に信憑性が出てくると思わないか？」

なるほど。確かに川崎の言うことは的を射ている。

人を怖がらせようとおもしろ半分で流れた噂ならこの事件は好都合だ。

しかし、事件をきっかけに幽霊は消えた。

幽霊は本当にいたのか？

幽霊は実在するのか？

川崎に話を聞いて、それでおしまいのもりだった彼のこと。

しかし、気になることが増えてしまった。

彼のことを知りたい、彼にもう一度会いたいなどという感動的な理由ではなく、知的好奇心という実に人間的な理由で気になるのだ。

*

「ねえ、母さん。聞きたいことがあるんだけどいいかな」

川崎は事件のことは連絡網で回ったと言っていた。それなら母は知っているだろう。

「山で起きた事件についてなんだけど」

そう口にしたとき、明らかに母はびくつとした。

「どうしたのよ、いきなりそんな事聞くなんて」

「今日学校でたまたまその話題が出てさ、僕意外みんな知ってたから驚いたよ」

「ああ、そうなの」

母は下を向きながらつぶやいた。

どうしたんだろう、何か僕に後ろめたいこともあるのか。

「気味が悪い事件だったみたいだね。そのときって連絡網とか回ってたみたいなんだけど」

「そうだったかしら。昔のことだからあまり覚えてないわね」
明らかに母は何か隠していた。
「ならいいんだ。そういえば小さい頃の僕が山でよく遊んでいた
子の話したことあったっけ？」
「さあ、そんな友達いたのね。知らなかったわ」
母は僕をじつと見てそう言った。

*

不可解なことがまた増えた。
母は何か知っている。
部屋に戻り、一度これらを整理してみることにした。
まず、僕は山で彼に出会った。
そして山で彼と遊んだ。自分の記憶を信じるならこれは真実だ。
しかし僕は彼の顔を覚えていない。おぼろげにも思い出せないの
だ。

その頃から山で子供の幽霊が出るという噂が流れ始める。
さらに山で事件があった。残酷で悪趣味な事件。
母はこの事件について知っているようだったが、僕は何も聞かされ
ていなかった。
事件後、幽霊の噂は消えた。
正確な日時は分からないが彼が消えたのもこのあたりだと思う。
これが一応の流れになる。
僕は貧困な頭で必死に考えてみることにした。

彼は幽霊。山に一人で寂しかった。そこに現れた僕を見つける。
彼はまだ子供なのに死んでしまった。だから一緒に遊びたかった
んだ。

姿を現した彼は山に来る人々に目撃される。
幽霊独特の奇妙さから彼を見た人はすぐ逃げてしまいが、僕とは

打ち解けた。

そうして山で事件があった。僕と彼の遊んでいた山で。

彼は怒った。そして自分の力を使い果たし、犯人を倒して山に埋めた。

その後、彼は僕の家到最后の挨拶に来た。

しかし僕はいなかったのだろう、母に僕との関係、事件のこと、そして山の安全は守られたことを伝え、あの世に帰っていったとき。めでたしめでたし。

「はあ……」

自分の貧困な思考に寒気がした。

これじゃ、彼は山の精でしたとでも付け足せば、いい御伽噺じゃないか。

もう一度最初から考えてみる。

彼は本当に幽霊だったのか。噂が流れた時期も合致しているが。いや、根本的なことだがはたして幽霊なんか存在するのか？

存在しない、と考えるほうがよっぽど現実的だ。

では彼は人間の子供ということになる。

顔が思い出せないのは記憶の曖昧さが原因か、それとも彼の顔に原因があったのか。

とにかく一緒に遊ぶことになる。

しかし、ここで幽霊の噂に納得がいなくなる。

これとそれとは全くの別問題なのか？

いや、それにしても出来すぎている……。

出来すぎ？

確かに出来すぎている気がする。

幽霊の存在を肯定したくなるほどに。

これは作り物なのか、と疑った。

全部作り物。誰かがこうなるよう操作したのではないか。

今度は操作した人物を登場させ、話を進めてみる。

その人物は僕と彼が遊ぶことに、理由は分らないが抵抗があった。

まず幽霊の噂を流し、僕、あるいは彼が山に行かないように仕向ける。

小さい町だ。噂はすぐに広がっただろう。

幽霊を怖がる子供は山へ行かなくなる。

しかし僕たちは山に行った。

そこである事件だ。

犯人はその人物。

事件があつたとなるとさすがに親に山へ行くことは止められるであらう。

そして彼は僕の前から姿を消した。

この話にも無理があるのは承知だが、幽霊よりはずっとありえるだろう。

彼はもしかしたら病気かなにかだったのかも知れない。そして常に顔を隠していた。

それなら彼の顔が思い出せないのも納得がいく。

僕が事件について知らないのは、その人物が僕にその事件を知ってほしくなかったから。

しかしだ。もしこの話が真実だとしたら僕は一番疑いたくない人を疑わなくてはいけない。

僕の事を一番大切に思ってくれている人物。

それはきつと母だ。

*

「おい、佐々木。聞いているのか」

「ああ、ごめん。何だっけ」

昨日の夜、彼について一応だが納得した。

僕の、よく考えればいろいろ無理が生じる勝手な推理だが、なぜか正しい気がしていたのだ。

思えば母は僕に対し、少し異常なくらい過保護であった。

今ではそんなこともないが、僕が子供の頃から。そういえば彼と出会った頃からだ。

「ちゃんと聞けよ。例の幽霊について進展があるかも知れないんだぞ」

「ん、どういうことだ？」

「お前、西村さんのこと知ってるだろ？」

西村さん。この町に住む少し変わったおじさんだ。

仕事は何をしているかは分からないが写真を趣味とし、よく山に撮影に行っている。

「ああ、知っているけど。西村さんがどうかしたか？」

「実は西村さんもオカルト好きらしくてな。結構山で心靈写真とか撮ってるみたいなんだよ。それでお前もオカルトに目覚めて例の幽霊の話を聞きたがってるって言ったら驚いてな。もし本当に知りたいのなら僕のところに来るように、だよ」

「西村さんが言ったのか？」

「ああ、昨日確かに言ってたぜ。俺には教えてくれなかったのにさ。なにか分かったらちゃんと報告しろよ」

「ああ……」

西村さんとはそこまで親しいわけではない。

それなのに僕が呼ばれた。

西村さんは事件を見ていたのか？

とにかく学校が終わったら西村さんのところに行ってみよう。知ることはきっと辛いだろう。

しかし僕は知りたいのだ。

「こんにちは」

「ああ、よく来たね。まああがりなよ」

西村さんは笑顔で迎えてくれた。
なにやら拍子抜けだ。

「それで、佐々木君は例の幽霊についてどこまで知っている？」

居間に通され、小さなテーブル越しに向かい合う形で西村さんが話し出す。

「いえ、何も。ただ幽霊なんかいないんじゃないかな、とは思いますが」

自分の推理については言わないことにした。

母を疑っているとは誰にも知られなくなかったのだ。

「そうか。幽霊はいない、それは正解でもあり、間違いでもある」
「えっ」

「それは君が決めることなんだ。ところでこれから君に話そうとしていることは君にとってあまり気持ちのいいものではないかも知れない。それでも聞きたいかい？」

少し考える。

西村さんの話しぶりで僕は自分の推理に確信を持ったからだ。

ここでやめてもいいかも知れない。

それが正解な気がする。

「はい。話してください」

自分はまだ若く、それだけ好奇心が大きかったのだ。

「うん、分かった。君には知る権利があるし、僕はそれを義務だとも思う。君は偉いよ」

そう言って西村さんは一枚の写真を取り出した。

「これを見せてくれ」

渡された写真を手に、僕は大きく深呼吸した。

心臓がとても早く動いているのが分かる。

ゆっくり。とてもゆっくりと写真に目を移す。

そこにはたくさんの動物を殺す一人の少年が写っていた。

やつと思ひ出した。彼の顔を。でも、これって。

「分かるかい？それは君だよ」

これって僕だ。

彼は僕だった？

え。どうということだ。

「その頃から君のお母さんに相談を受けていてね。僕はここに来る前に精神科医をやっている」

頭がぐるんぐるんまわる。

心臓が狂ったように暴れだす。

そして僕は彼の声を聞いた。

「また会えたね」

それはとても小さい声だったけど、確かに僕の中から聞こえてきた。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

よろしければ感想、評価等いただけると今後の励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6552/>

ヤマノウラ

2010年10月28日02時38分発行